

『ジャン・クリストフ』第 3 巻 女友たち

片山敏彦 訳

報告 中田 裕子

朗読 松田 由美子

ジャクリーヌとオリヴィエとはしばらくの間、再び互いに近い気持ちに戻っていた。ジャクリーヌの父が亡くなっていた。この死は彼女の心を深く揺り動かした。ほんとうの不幸に直面してみると、他のいろいろな悩みもものの数ではないと思われた。

喪の悲しみからの回復のためにと医者からすすめられて、少しの間パリから離れることに決め、オリヴェとともに旅立った。二人の結婚の最初の年に、彼らがそこで愛し合ったいくつかの場所への巡礼ともいべき旅であった。道中のふとした機会に、もう見失ったと思っていた大切な「愛」のおもかげを再び見つけたり、それはまたしても隠れ去って見えなくなるだろうと覚ったりするとき、悲しくなつかしい気持ちの中で、彼らはその「愛」のおもかげを、絶望的な激しさで引き留めようとした……

朗読 1

こんにちの女性達の不幸は、彼女らがあまりにも自由でありながら、しかも十分に自由でないことである。彼女らが更に自由であったならば、彼女らは束縛を求めて束縛の中に魅力と安全とを見出すことだろうし、また現在ほどの自由をもっていないなら、彼女らの力で断ち切ることはできないだろうその束縛に順応して、束縛のために悩むことは一層少ないことだろう。

だが彼女は、この家から出ていくことはできなくはない、という意識があった。そしてそのために窒息しそうな気になっていた。彼女は今までの生活に叛きたければそれができた。そしてしまいにはどうしても叛かなければならないような気になった。

絶えず彼が自由人ではありえないと言いつつ聞かされていれば、いつしか実際彼はもう自由人ではなくなり、ばかげた真似をしないための抵抗力をなくしてしまう。女性には責任があり、女性は自分の肉体と意思とを支配する力があることをいつでも女性が言われていれば、女性は事実そうなるだろう。 ジャクリーヌがその中にはいっていたおもしろからぬ

環境がついに彼女を脱線させた。彼女は若い頃には軽蔑していたような人々との社交生活に復帰した。

人間らしいいろいろな精力と、強壯な生命力と、原始的動物性と、それへの信仰・意思・情熱・義務がその中に溶け去ってしまう、そのぬるま湯のなかへ自分が溶け込んでいく感じを彼らは楽しんでた。こんなねとねとする考えの中にジャクリーヌの美しい肉体は浸っていた。彼女にそうさせないようにすることはオリヴェにはできなかった。きわめて悪いことに、彼女は、あらゆる曖昧さを嫌う心の全部を、あの曖昧な世界にもちこんだのだった。

彼女の新しい友人たちは、じっさいは外観より遥かに用心ぶかい人たちであった。道徳上の、または社交場の先入観に関して理論的には完全な自由を構えながらも、実行の点になると自分たちにとって有利ないかなることも衝突を避けるように心がけていた。しかし、いっそう率直なジャクリーヌは、もっと本腰でふるまった。

朗読 2

ジャクリーヌは病気が直ると、からだは強まり、肥えふとり、若返っていたが、心は更に一層病んでいた。数か月のあいだ独りきりで別居生活をしたことによって、オリヴェの思想的な絆がすっかり切れてしまっていた。——彼の洞察力のある愛の圧力を彼女が自分の心の上にもう感じなくなり——彼女が自由になるやいなや——二人の心に残っていた友愛的信頼の情が今度は、自分は彼への愛によって自分を無益に浪費したという怨みの情にかわり、また、彼女自身はもはや心に感じることでできない一つの愛情の束縛の重みをこんなにも長いあいだ荷いながら我慢してきたのだという憎しみに変わった。彼女が愛していた人は、彼女の考えの中から削除されてしまっている。彼は自分が彼女にとってもう何ものでもないことを突然気づく。そして彼にはわけが解らない。退潮しつつある愛情のこの恐るべき流れに抵抗して効果のある、戦いをするためにはオリヴェとはまた別種の男でなければならなかったろう。

彼女は彼を憎んだ。最もわるいのは、顔をつき合わせていながら何日も二人が口をきかずにいるその沈黙だった。彼ら二人はすることなすことが、相近づくためにしたことさえも、相離れる原因となるような立場にまで来てしまっていた。もはや生活が耐えがたいものになった。一つの偶然が成りゆきの速度を早めた。

1年以來セシル・フルーリーはときどきジャンン家を訪れていた。オリヴェはクリストフのところと彼女に会って知り合いになっていた。クリストフがオリヴェ夫婦から遠ざかった後もセシルはこの夫婦との交際を続けていた。彼女がジャンンの家の客間に入ってくると、その打ちとけたまなざしと、健やかな様子と、聞くものの耳に快い、いくらか太い、明るい笑い声とのために、一條の光線がつらぬくように感じた。するとオリヴェもジャクリーヌも気持ちが軽くなり解放されるように感じた。

朗読3

ジャクリーヌはオリヴィエの心を今一度自分へひきもどそうとは全く考えなかった。もうおそすぎる！彼女は彼をもう充分には愛していなかった。もしくは、あまり愛しすぎたのかもしれない……じっさい、それは嫉妬心からのことではなかった！全部の信頼が崩れ落ちたのだ。彼女の心の底に残っていた、オリヴェへの信仰と期待とがすっかり失われたのだ。

この日オリヴェはジャクリーヌが懊悩していたことについては何も知らなかった。しかし彼が彼女に再び会ったその瞬間に、もう万事がだめだと彼も感じた。

オリヴェは圧倒されてしまってもうどうしようもしなかった。自分は退却してジャクリーヌの心の舵を取ることを断念してしまった。ジャクリーヌの心は水先案内をなくして自分の一存にゆだねられると、自分の自由さに酔ってよろめいた。この時以來彼女は、オリヴェとのつながりからすっかり脱したと思い込んだ。おそすぎないうちに恋をしようとのぞんだ。偶然出くわした男に、見かけばかりの姿に、一つの名声に、ときとしては単なる一つの名前に、空想的な、激しい恋情をそそぎかける気持ちを彼女は味わった。そんな情熱につかまされると、それから離れることはむつかしく、そして心は、そんな恋情が選び取ったその人なしにはもはや生きられないと感じ、心の全部がその情熱のために食い荒らされ、その心を充たしていた過去のすべての内容が絶対の空無に還元され、その恋情以外の他のいろいろな愛情も、善悪についての考えも、数々の思い出も、自尊心も、他の人々への尊敬心も消えうせる。だがやがてこの気違いじみた固定観念も、それを養い育てる内容が何もないために消え滅びるときが来てみると、後には荒れた焼け跡だけが残っており、その廢墟から今度現れ出る性質には、親切さもなく、同情心もなく、若々しさもなく、夢もなく、ただ生命を食い荒らすことだけを考える。

朗読4